

循環器疾患と妊娠・出産

企画：梅本朋幸

(東京医科歯科大学 循環器内科)

実臨床においては、頻繁に遭遇することはないかもしれないが、循環器診療に関わる者にとって、産科や小児科の先生から「妊娠・出産」に関して相談を受けることがある。特に、先天性心疾患に対する治療の発達と長期予後の改善に伴って、心疾患合併症例の妊娠・出産に関して、臨床現場で頭を悩ませる症例も増加している。また、この領域は、他の循環器疾患と異なり、エビデンスの確立が困難な領域であり、個別の症例での判断が要求される、いわば経験がものを言う領域とも言える。そこで、今回は、『循環器疾患と妊娠・出産』というテーマで、各方面でご活躍中であり、かつ、経験豊富な先生に執筆をお願いした。

赤木禎治先生からは、対処にあたっての大前提である、妊娠・出産時に起こる母体の血行動態変化について、解説いただいた。通常の循環器診療では触れることのない内容であり、他科よりコンサルトを受けた場合、再確認したい項目ばかりである。

神谷千津子先生からは、先天性心疾患を持つ女性の妊娠・出産というタイトルで、妊娠リスクの評価に始まり、妊娠中の検査と薬物治療について詳しく解説いただいた。また、御専門である産婦人科医の立場から、分娩方法および分娩後の予後についても分かりやすく役に立つ内容である。

鮎沢衛先生からは、今後も症例数が増えていくことが予想される、川崎病既往患者の妊娠・出産について、歴史的背景および全国調査のデータをもとに、現時点での問題点や今後の展望について解説いただいた。特に、いくつかの自験例を具体的な投薬量も含めて提示いただけており、実臨床の対応において大いに助けとなる。

上塚芳郎先生からは、機械式人工弁置換術後症例における対処方法を解説いただいた。妊娠前カウンセリングの重要性を始め、周産期を通じて必須となる抗凝固療法について、ガイドラインにおける位置づけとその問題点についても具体的に言及していただいた。

前嶋康浩先生からは、自己免疫疾患合併症例について解説いただいた。特に生殖年齢の女性に好発することが多い免疫異常の中で、比較的頻度の高い高安動脈炎と心サルコイドーシスについて詳しく解説いただいた。難治例ではステロイドに加えて、免疫抑制薬を併用するケースもあり、最近使用される薬剤についても詳しく解説いただいている。

今回、各先生には、特に具体的な対応について分かりやすく解説いただくようお願い申し上げた。遭遇するかもしれないその日のために、是非、本号を手元に置いていただければ幸いである。



HEART's
Selection